



暗い照明に慣れてみては？

出産し病院から自宅に戻り、何気なくつけたテレビのトップニュースは、あまりにもショックでした。

国道を走る白いワゴン車が波に飲み込まれる様子は、いまでも私の頭にはり付いて忘れることができません。

彼らはいったいどうなってしまったのだろうか、そして、その他大勢の被災者達はどうやって暮らしているのだろうか。何か私に出来ることはないだろうか。

フィンランドでも、東日本大震災の状況はしばらくトップニュースでした。こちら在住の日本人のあいだでも募金活動が行われ、私自身も日本人として何が出来るか、いまでも真剣に考えさせられています。

ところで、ヨーロッパへ旅行でいらっしゃる日本の方々、こちらの照明が暗いと言われます。

逆に、ヨーロッパの人々が日本へ行くと、部屋や店内の照明がまぶしすぎてリラックスできないとぼやいております。

私の主人が、日本の私の母の家を訪れると、彼一人で家の蛍光灯を消して回っています。夜に部屋の蛍光灯がまぶしすぎるそうです。そこで、一つ私から提案させてください。日本の皆さん、省エネが課題となっているこの機会です。せめて、夜6時以降には、

暗い照明に慣れてみてはいかがでしょう？

思えば、日本人はこれまで明るい照明に慣れすぎて来たのかもしれない。夜の照明を少し落とすことで、省エネにつながるだけでなく、リラックス効果も得られます。

もう一点。日本では夏には朝5時前から日が昇りますが、私としては、この朝の光がもったいなく感じます。

例えばヨーロッパでは、夏には1時間時間が早まります。この機会に日本でも夏時間制を導入しては如何でしょうか。

夏時間制には、省エネだけでなく、様々な経済効果も期待されています。最後に、知人を通じて「東日本大震災被災青年支援奨学金基金」をサポートさせていただいています。この場を借りて宣伝させていただきます。

(<http://www.okikobo.com/>)
UNECS International Ltd.
アブレウ聖子



～ A breu Seikoさんのご紹介～

聖子さんは文部科学省直轄の科学技術政策研究所勤務時代にベンチャーや金融関連に関心を持たれVEC関西支部交流会へ熱心に参加されていました。

ご結婚後はフィンランド オウル市に在住され、大学や公的機関とベンチャーの育成研究など多方面でご活躍され、家庭と両立の充実した生活を送られています。

VEC関西支部 事務局

『てんこもり』へ明るい・元気な情報を発信します！

今回から連載させていただくことになりました。

日本はデフレ経済、東日本大震災と、メディアでは暗いニュースが溢れています。

このコーナーでは、そんな暗いニュースとサヨナラし、元気に活躍されている中小企業をご紹介して、勇気とやる気を引き出します。連載に当たって、現在、ボクが発行しています月刊紙「日本一明るい経済新聞」を説明します。フジサンケイグループの日本工業新聞（現サンケイビジネスアイ）に在籍していたころから、いつも思っていることがありました。それは、日本のマスコミが悲観的ということです。

◎批判と悲観取り違える

間違ったことを正す批判の精神はマスコミにとって大変重要なことです。が、悲観の精神はいただけません。どうも日本のマスコミは、批判と悲観を取り違えているように思えます。

モノゴトを悲観的というか、厳しく書くと良く勉強した記者だと評価が上がると誤解。逆に楽観的に書くと、「ノーテンキな記者やな」と、読者から批判されると思っっているようです。記者だけでなく日本中が悲観的な見方が賢く、楽観的な見方がアホというような漠然とした意識があるのではないのでしょうか。

そろそろ日本も、悲観的になりすぎていることを反省すべきです。「アカン」「アカン」では、元気は出ません。「よし！やったるで」という前向きな経営姿勢が必要です。

◎明るいアジテーター役

そんな明るいアジテーター役として発行しているのが「日本一明るい経済新聞」です。

この新聞には、暗い経済情報は一切載せていません。明るい経済情報ばかりです。この厳しい経済環境でも、元気な会社はたくさんあります。そこには必ず元気なヒミツが隠されています。その元気経営の秘密を探り紙面で発信し、多くの経営者さんにマネしてもらいたいと思っています。

次回からそんなやる気満々の会社で、元気でんこ盛りにしたいと思っています。

プロフィール＝昭和46年4月現サンケイビジネスアイ入社、大阪経済部長を経て平成13年1月に独立、産業情報化新聞社設立。自転車に乗って年間約500人の中小企業経営者に取材、日本一明るい経済新聞を発行。毎日新聞紙面研究会研究員（平成20年度）、吉本お笑い総合研究所コンサルティングフェロー、大阪大学大学院非常勤講師、NHKテレビ「おはよう関西」元気な中小企業に出演中。

日本一明るい経済新聞編集長
四條畷学園大学短期大学客員教授
竹原 信夫



敷居は高くありません

我々弁護士はとかく「敷居が高い」と言われています。それにはいろいろな原因があると思いますが、具体的には、(1)身近でない。何処にいるか分からない。(2)何を相談できるのか分からない。的はずれなことを相談して笑われないか、怒られないか心配。(3)費用が高い。値段の書いてないメニューと同じで、いくら掛かるか分からない。等々のことがよく言われます。

その背景には、従来の我が国では、弁護士を使って裁判するというようなことは一部のお金持ちの人だけがやることとされてきたようなところがあると思います。普通の人は、泣き寝入りをするか、裁判以外で、誰かに入って貰って話し合いで解決するというパターンが普通だったのでしょね。それ故に、一生裁判所に行ったこともない、弁護士に会ったこともないという人が殆どというのが今までの日本の実情だったと思います。

私が司法試験に合格したとき、父親が「自分の息子が弁護士になるとは思わなかった」という言葉を発したのを今でも覚えています。

私自身も自分が弁護士になるとは思っていなかったのですからそれも当然かも知れません。確かに人の動きが少なく、地縁血縁が強固の昔であれば、裁判以外の話し合い等の解決手段もあり得たし、また相談する人も多かったかも知れません。しかし、人のつながりが薄れ、さらには海外とのつきあひも増えるという状況になった今日では、他に適当な解決手段がない、或いは相談する人もいないという場合が多いのではないかと思います。そういう状況からすれば、弁護士はもっと活用されていいと思います。勿論、何でも裁判に訴えた方がいいというわけではありません。今の日本の裁判の現状が紛争解決に適したものになっているか自体も多大な疑問があります。しかし、裁判だけが紛争解決の方法ではなく、他の方法もないではありません。また、「NO」と言っている人間に、非合法ならともかく、合法的に言うことを聞かすことができるのは裁判しかないというのが現実です。

そして弁護士は、あらゆる事件・採め事を扱っているのが普通です。例えば、会社の設立から清算まで、特許等の知財関係、あらゆる契約問題、債権回収、製造物責任、消費者問題、賃貸・売買等の不動産事件、離婚・相続・後見・遺言等の家事事件、告訴を含む刑事事件や少年事件、医療過誤、税務訴訟 etc.

自らがその事件を直接処理できない場合でも、それを処理できる人間を紹介する人脈も持っているのが普通です。弁護士以外でも弁理士、税理士、公認会計士、不動産鑑定士、司法書士、土地家屋調査士、測量士、建築士等々。まさに弁護士こそ悩み事や相談のデパート・総合商社なのです。相談の費用もそれほど高くはありません。普通は30分で5000円(消費税別)ぐらいです。相談だけなら何度でも可能となる顧問弁護士の顧問料も、基本としては月額1~3万円程度が相場です。裁判や相手方との交渉の費用はさすがに安くはないですが、それでも分割等々ご相談には応じます。まずは気楽に相談して頂くのが一番です。敷居を低くして待っています。どんどんご相談下さい。

門間秀夫法律事務所 弁護士 門間 秀夫
〒530-0054 大阪市北区南森町2丁目2番2号 南森町千代田ビル5階
電話：06-6363-2798 FAX：06-6363-2681
メールアドレス：kadomalo@trust.ocn.ne.jp
ブログ：「しあわせ弁護士日誌」
<http://hideo821367.blog119.fc2.com/>



芸人「宇治原君」

数年前、所属する大学の学園祭が秋にあったおり、ステージで漫才をする「宇治原君」を直接見る機会があった。学生自治会が予算で呼べる範囲のギャラであったのだろう。彼が京都大学卒業の異色インテリ芸人であることは、それ以前から知っていたのだが、期待に違わず素晴らしい細身の好青年であった。

軒並みテレビのクイズ番組でトップの成績を取り続けて一躍「売れっ子」となったのだが、民放番組は視聴率即ち視聴者の支持なしには成立しない。

世の老若男女特に小学生とそのママ達に広く支持が広がったと推察される。教育ママ達は、わが子が京大の学生となった姿を「宇治原君」に重ねているのだろう。

テレビ番組にある俗悪な暴力や露骨な性描写表現がママ達に批判されて久しいが、「宇治原君」現象は、21世紀の日本社会が健全である証左に見える。

さて、「宇治原君」の解く問題のレベルはどれ位のものだろうか。漢検一級や準一級等々を除外すれば、大半の問題は義務教育で教えられた範囲のものではないか。チャンと義務教育やその後の高校教育を修得した者には、ほぼ正解できると考えられる。自身で回答してみた結果からそう言える。多分、視聴者である義務教育課程にある中学生や現役高校生は、「宇治原君」レベルの諸君も多いのではなかろうか。

「宇治原君」現象の女性版は、女優の宮崎さんである。二人に共通なのは義務教育後、数十年を経てもその頃の記憶・学習した内容や知識が鮮明に蘇ることである。加えて両氏とも国立京都大学と国立熊本大学の卒業であることである。

その頃の大学受験(公立高校の受験も同じ傾向)では、英数国社理の5教科すべてが受験範囲であり、見事合格する生徒は、オールラウンダーであったことである。

公立高校への入学でも同じことが課され受験生は全科目に目配せや力配分をしたものである。(公立高校全入制度以前の昔のこと)

一芸入試や特別優れた能力・個性を評価するのは、「よいこと」とされ現在の日本社会でも取り入れられ、その能力や個性が開花している。それらを集め、統合し、運営してゆくのは誰か。今、流行のドラッカー流に言えば、個々人の長所や卓越した力を上手く引き出し、組織(企業等)に活かす能力がマネジメントである。そのマネジメント能力(=マネージャー)をオールラウンダー「宇治原君」に見るのである。

太成学院大学 経済学部長 関戸 恒昭



「アルプス三大山群ハイキング」

仲のいい 夫婦の秘訣 放し飼ひ

某新聞の川柳コーナーにあった句である。至言だと思う。夫婦仲のことで悩める夫婦に送りたい句である。お互い、相手に柵を設けず、つまり拘束をしない。しかし、重要なことは放つたらかすことではなく、飼う…つまり目配り気配りだけはちゃんとやっていることだ。わが夫婦はこれだと思う(?)。別の言い方をすれば自立した夫婦である。

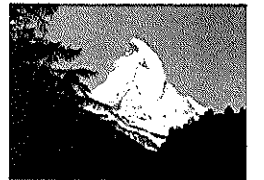
ところで、その放し飼ひ同士の夫婦が年に一回、仲良く一緒に外国の山を歩くようになって4年目になる。今年は、「アルプス三大山群ハイキング(2011.6.17~6.26)」というツアーに参加してきた。晴れ男の異名が高い私だが、ツアーリーダーもびっくりするほどの最高の天候の中の山歩きをしてきた。

ユングフラウ、アイガー、マッターホルン、モンブラン・・・(その近くで眺めただけだが)、すべて、頂上までくっきりと晴れ渡った空にそびえたつのを確認することができた。たとえ、移動中には雨が降っていても、ピークを眺めたり、ハイキングする現場に到着すると、雲が遠慮して消えていくようなのである。

いろいろな体験もできた。ヨーロッパ最高所の鉄道駅ユングフラウヨッホ(3,454m)では、マイナス9℃の雪原を歩いているとき、グループの一人が風で帽子を飛ばされた。そこで、かっこよく、小走りになって、拾いに行きあげた。すると、頭フラフラでめまいを起こしそうになり、空気の薄さを実感したりもした。

しかし、圧巻は何と言っても、マッターホルンの勇姿をみたことだ。よく見る東壁ではなく北東から眺めたこの山は、単なる屹立とした険しい山というだけではなく、大空に向かって高らかに吼える獅子のようにも、あるいは毅然とした姿のスフィンクスのようなにも見えた。

せっかく、自然のエネルギーを堪能してきたのに、帰って来た日本は、蒸し暑すぎる日本になっていた。いっぺんに夏バテ状態になってしまったのが残念だった...



藤井 暉彦



～VEC関西より～

◆「てんこもり」も読者や寄稿者のお陰で益々充実してきました。ご協力有難うございます。VECでの交流会だけでなく、「てんこもり」を通じての交流の深まりを醸成してゆきたいと願っています。(本田)

♥なでしこジャパン!優勝!本当に素晴しかったです。一致団結で勝ち取った勝利ですね。それには監督・選手の信頼感・・・。リーダーが良ければ最高にいいものが生まれ、この様に世界を目指す事も夢ではないかもしれません。(藤本)

♣これから、てんこもりへ明るい・元気なメッセージを頂きます竹原信夫様は関西を活性化したいという熱い思いから、元気な会社の明るい話題を1人で、それも自転車取材されています。「日本一明るい経済新聞」は今年7月で169号のロングラン、発刊以外でもベンチャーや中小企業のネットワークづくり、学生へのサポート、講演など多方面で活躍されています。(澤村)

◆<交流会>

平成23年9月6日(火) 大阪中小企業投資育成株式会社
業務第3グループ 部長 北浦 一雄 様

☎:06-6263-0366

皆様からのご意見・ご要望お待ちしております!